

2018年度モンゴル活動報告

期 間：2018年8月1日～5日

場 所：ウランバートル

参加者：小久保 謙一（国際委員会）、山本 裕子（国際委員会）、木村 絵美（国際委員会）、徳田 勝哉（国際委員会）、松原 弘和（国際委員会）、長沼 俊秀（大阪市立大学病院）、花岡 吾子（大阪市立大学病院）

モンゴル国と JSTB の共同開催で第 2 回 Mongolian and Japanese Joint Seminar on hemodialysis Technology を 2 日間の日程で行い、7 名の国際委員会メンバーが参加したのでその活動報告をする。

ジョイントセミナー初日は国立第一病院にてハンズオンを行った。ハンズオンの講師は国際委員会メンバー全員で分担して行った。モンゴル側の参加者は医師、看護師、エンジニア・テクニシャンの職種毎にそれぞれ 30 人程度のグループに分かれて、医師と看護師グループはバスキュラーアクセスエコーおよび水質検査（生菌検査・Et 測定）、エンジニア・テクニシヤングループは装置メンテナンスおよび水質検査を午前/午後で内容を入れ替えて実施した。日本から超音波診断装置、エンドトキシン測定システム（富士フィルム和光純薬社製トキシノメーター）や現地で使用されているニプロ社製透析装置の部品を持ち込み、最初にスライドで概要を説明した後、実機を用いて実習を行った。ハンズオンの参加者はみな熱心にメモや動画をとっており、多くの質問があった。

2 日目はモンゴル保健省会議場にて、モンゴル腎臓学

会と合同で講演会を行った。国際委員会メンバーからは 6 名が計 8 講演を行った。講演内容はモンゴル側から要望のあった項目（ドライウエイト、バスキュラーアクセス、HDF、CRRT、アフェレシス療法、および IgA 腎症）についてモンゴル語通訳を介して英語または日本語で発表を行った。講演会の参加者はおよそ 120 名あり、講演会終了後には活発な質疑応答があった。

今回、新たな試みとしてセミナー参加者を対象に、所属施設の規模や使用している透析装置の種類、セミナーの感想や今後のセミナーで行って欲しい内容などのアンケート調査を実施した。また、微生物検出用シート状培地（ニプロ社製シートチェック）を使った生菌検査の多施設調査を行うことになった。両者とも結果がまとまり次第、学会報告する予定としている。

今回のセミナーは参加者からの評価が高く、モンゴル国内のメディア（テレビ、新聞）にも紹介され、翌年も 8 月頃に第 3 回ジョイントセミナーを継続して開催することが決定した。

